

■ 論 文 ■

1930年代の朝鮮文壇

－なぜ金来成ひとりが朝鮮探偵小説を体現したか－

李 建 志

(関西学院大学社会学部教授)

■ 要 旨 ■ 1930年代の日本と朝鮮は、戦争直前という時代背景のなか、さまざまな猟奇事件が流行っていた。しかし、これを受け入れる市民は、朝鮮と日本でずいぶんと大きな隔たりがあったように思う。ここに、金来成という作家がいる。彼は、戦前に江戸川乱歩の弟子として推理小説を書いていたが、戦後には推理小説を書かなくなった、いわゆる大衆作家である。彼は1930年代に朝鮮でデビューしたが、彼に続いて推理小説を書くものはいなかった。では、なぜ朝鮮文学の世界で彼だけが推理小説を背負ったのだろうか。これを、筆者は、金来成の二流性＝時代の変化に飛びつくことはよくするが、その時代の変化の意味を悟ることができなかった作家としての特性によるものだと考える。

本稿では、まず当時の朝鮮文壇の状況を、当時のことを描いた小説「九人会をつくる頃」を参考にうつしだし、さらに当時の日本の推理小説界と、日本の社会状況をそれと比較させることで、日本と朝鮮の「空気」の違いをうきほりにすることを目指す。

■ キーワード ■ 朝鮮文学、1930年代、探偵小説

はじめに

キム・ネソン
金来成は平壤に生まれ、東京の早稲田高等学院および早稲田大学に留学し、1935年には日本語で探偵小説を書きはじめた作家だ。朝鮮では1937年に朝鮮日報紙に連載した「仮想犯人」をはじめたくさんの探偵小説を書いたが、彼に続く探偵小説専門の作家は、ついには朝鮮では現れなかった。彼が亡くなった1950年代以降、次に探偵小説（ミステリ）を書く専門作家は、1970年代のキム・ソンジョン金聖鍾まで待たなければならず、その後も金聖鍾ひとりが背負う時期が続く。

しかし、なにゆえに朝鮮では1930年代に探偵小説作家が金来成のほか現れなかったのだろうか。実際、当時、探偵小説自体はぼつぼつと発表されており、決して誰も書いていなかったわけではないのである。そのなかで誰もが探偵小説を連続、継続して書こうと思わなかったということにはなにか意味があると考えられる。

そこで今回は、1930年代の朝鮮半島での文学の状況をふまえて、金来成がひとりで朝鮮探偵小説を担ったかを考えることとする。当然、その過程では、当時の日本の文学（主に探偵小説）の状況や、社会情勢などが参考とされることとなるだろう。

1 金来成とは誰か

金来成は1909年5月に平壤の郊外にある平安南道大同郡南串面内里の小地主であった金榮漢^{キム・ヨンハン}の次男として生まれた。1925年に平壤若松公立普通学校（小学校）を卒業後、平壤高等普通学校（旧制中学）へと進学した。1930年に同校を卒業した彼は、翌年に早稲田第二高等学院に入学、1933年に早稲田大学法学部に進学した。

この早稲田大学在学中に、金来成は日本の探偵小説雑誌でデビューを果たす。1935年3月に『ぶろふいる』誌に「楕円形の鏡」を、同年9月には『モダン日本』誌に「奇譚恋文往来」（筆者未見）を、さらに同年12月には『ぶろふいる』誌に「探偵小説家の殺人」を発表、翌年の4月には『月刊探偵』誌に「探偵小説の本質的要件」を発表している。

後に関連するので先に触れるが、『モダン日本』誌の編集長は朝鮮の児童文学の作家としても知られる馬海松^{マ・ヘソン}であった。この雑誌はもとは文芸春秋社から出されていたが、「モダン日本社」として子会社化される。そして、1939年には創刊10周年記念として『モダン日本朝鮮版』を出版し、朝鮮文学と日本との関係に大きく関与しはじめ、朝鮮文藝賞を創設するに至る。これは日本の雑誌社が日本語で書かれた朝鮮の作品に賞を与えるというもので、体制翼賛的な賞だったといえる。

金来成に話を戻そう。彼は1937年2月13日から3月21日まで、朝鮮でのデビュー作となる「仮想犯人」を発表（内容は前出の「探偵小説家の殺人」と同じ）、以後主に朝鮮日報紙と『朝光』誌（朝鮮日報社が出していた雑誌）などに作品を発表し続けた。1937年には中・短編が3編、長編は『白仮面』（『少年』誌連載）の1編。翌28年には短編を5編、そして単行本『白仮面』の出版（朝鮮日報社）。さらに39年には中・短編を3編に長編『魔人』（朝鮮日報、2月15日から10月11日、12月に朝鮮日報社より単行本化）、40年に短編4編、41年に短編1編と長編『快巖城』（ルブラン『奇巖城』の翻案、『朝光』誌、1月～9月中断）、42年に長編『颱風』（『白仮面』を改作したもの、毎日新報社11月21日から43年5月2日）、43年にはラジオ放送小説として短編を「刺繍された松鶴」「ある女間諜」など数編ものしている。

このように、1937年から39年ぐらいまでが彼のいちばん活躍した時期であり、朝鮮日報や東亜日報といったいわゆる「民族」資本による新聞が強制廃刊された1940年以降は作品発表に支障をきたしているのがわかる。そして、朝鮮総督府の機関紙である『毎日新報』に連載したのを境に、徐々に活動を停止していく。

解放後（日本の敗戦後）には、1946年2月に「民族の責任」（『生活文化』誌、第2号）をいち早く発表するなど活動を再開し、1949年には彼の代表作といえる大河小説『青春劇場』を発表するのであるが、それは今回の内容とは直接関係ないことなので、これ以上は触れないこととする。

当時の彼の生活状態を知るために、1930年代の原稿料について見てみたい。後にも登場するが、趙容萬^{チョ・ヨンマン}の『1930年代の文化芸術人たち』（1988年）によれば、200字詰め原稿用紙1枚で30銭が相場であり、長編小説の新聞連載ならば1回で2円になったという（同書、112頁）。朝鮮では200字詰め原稿用紙で考えるのが一般的で、これは現代韓国でも同様である。上のようなエピソードか

ら、このような制度が1930年代には成立していたことがわかるようだ。それはさておいても、1937年の「仮想犯人」は全32回の連載だった。ということは原稿料として64円はもらっていたということだろう。

長編小説は『魔人』が171回、『颱風』が157回だから、平均して160回ぐらいの原稿の分量(200字詰め710~720枚ぐらい)だと考えて320円ぐらいにはなったはずだ。

前出の「仮想犯人」は、彼の作品のなかでは中・短編に属するのだから、各年度で考えると1937年には中・短編3編で180円ほど、長編『白仮面』で320円ほど、合わせて500円にはなっていたことだろう。月平均にすると40円強ということになる。

翌28年では短編5編でだいたい300円ぐらい、39年には中・短編3編に長編『魔人』でやはり500円。年平均で400円となる。その他、単行本が出ているのでその印税があるだろうと思われるから、だいたい毎年500円ぐらいの金額を筆で稼いでいたといえるかと思う。

当時(1932年頃)、京城帝国大学を出た趙容萬が、毎日申報社学芸部に勤務してもらっていた給与が月棒70円で「安い」とされていたので(同書、105頁)、これでは不十分だったようだ。ただし、日本人の場合は外地勤務の加俸がついて(判任官は本棒の6割、高等官は本棒の4割)、がんらい月棒75円の中学教員も日本人ならば120円になるということだ。趙容萬はそのため、とくに許可をもらってセブランス医科専門学校(現・延世大学校医学部)に英語の非常勤講師として出講させてもらっていたという。おそらくは年俸で1,200円ほどなければ不自由していたのではないだろうか。

趙容萬の証言によると、1923年から1926年に至るまで経営されていた『朝鮮文壇』という雑誌は、方仁根が私財を投じて創刊、運営していた。1917年に長編小説『無情』を発表した朝鮮近代文学の祖ともいえる李光洙が編集・経営に参加していたのだが、この雑誌も作家に対して原稿料は出せなかったという。ということは、当時の作家は新聞か新聞社の出している雑誌に書かないと生活そのものができなかったことになる。専業作家などというものは当時は日本でもそんなに多くはなかっただろうが、朝鮮ではほとんどありえなかったということがわかるではないか。

金来成の場合、『朝光』誌の座談会で朝鮮新聞社に属する主催者側として参加しているので、なんらかのかたちで朝鮮日報社とかかわっていたのではないか。彼は大卒だったし、作家としても活躍していたから、新聞社でも邪険にはしなかったはずだ。例えば雑誌記者や編集者として、そこから幾ばくかの給与を得ていたのではないか。そして、1940年に「民族」新聞が強制廃刊後には、和信百貨店に勤めていたという(趙靈巖『韓国代表作家伝』修文館、1953年)。

以上が朝鮮に帰ってきてからの金来成の横顔である。では、金来成は朝鮮文壇でどのような扱いをされていたのであろうか。それについて考えるために、当時の朝鮮文壇について覗いてみよう。

2 「九人会をつくる頃」

朝鮮近代文学を考える際、カップ(朝鮮プロレタリア芸術同盟)を抜きには語れない。こううと日本文学の研究をしているひとならば、次のような疑問を持つことだろう。日本ではプロレタリア文学といえば、理論先行でたいした作品が出なかったといわれているが、朝鮮ではいい作品が出

たのか、と。

これに対してある程度の答えを出してから先に進むことにしよう。まず、朝鮮近代文学のなかでカップの文学がいわゆる「成功したいい作品」を生み出すことができたのか、ということについてであるが、例えばカップの後半のリーダーとなった詩人であり評論家でもあり文学史家でもある林和イム・ファや小説家の金南天キム・ナムチヨンは、1930年代の朝鮮文学を語るとき欠かせない作家であり、彼らの残した業績はいまも優れたものとして分析対象となっているといえる。中央委員のひとりであった李箕永イ・ギヨンの『故郷』（1933年）なども、いま読んでも名作だと素直に思える作品だ。

また、なぜプロレタリア運動かといえば、当時の朝鮮では「朝鮮は日本に対するプロレタリアの位置にある」と、朝鮮全体を日本＝ブルジョアに対するプロレタリアと図式化する思考方式があり、実際に新幹会（1927年から1931年）など民族主義者（右派）と社会主義者（左派）の合作による団体も誕生している。ゆえに、プロレタリアとしての朝鮮というテーマは、やはりはずせないのである。

さらに、1980年代の半ばまでの韓国は、反共軍事政権の色彩が強く、カップの研究そのものが、なかなか大きく取り上げられない状況であったため、重要な文学運動のわりには後発の研究対象であった。このことが、現代の韓国におけるカップ文学の研究的価値を相対的に引き上げているともいえる。

もちろん、日本のプロレタリア文学運動と同じく、理論が先行しているという面もあるにはある。実際に1920年代まではそれほど大きな業績といえる作品が出ていないのも事実だ。これに対して、いわゆる「純粋文学」を標榜する一派が反対の立場から文学をものすことになる。この流れのなかに「九人会」（1933年から1936年）があるのである（以下、趙容萬の前掲書、123頁から139頁を参考とした）。

すでに登場してもらった趙容萬は、この「九人会」の世話人のようなかたちで関与している作家だ。原稿料を稼ぐため、各新聞社の学芸部長には作家が嘆願に言っていたらしいが、毎日申報にはちょうどそのとき学芸部長が退任したばかりで、ほとんど学芸部長のような仕事を彼がしていたようだ。だから趙容萬のもとに「九人会」の話がもたらされたのだろう。ちなみに、すでに触れたように毎日申報は朝鮮総督府が出していた朝鮮語による機関紙で、自由な立場の言論機関とはいいがたく、やはり「親日御用新聞」というイメージが強い。しかし、経済的にはもっとも安定していたといっている。

最初は1933年の夏頃、李鍾鳴イ・ジョンミヨン（小説家）と金幽影キム・ユヨン（映画監督）が趙容萬を誘い、「純粋文学」の作家を集めて会をつくろうと相談する。その際、各新聞社の学芸部の記者をしている作家に声をかけようといっている。毎日申報が趙容萬、東亜日報が客員として学芸面に関与している李無用イ・ムヨン（小説家）、朝鮮日報では学芸部記者の金起林キム・ギリム（詩人）、中央日報では学芸部長の李泰俊イ・テジュン（小説家）という布陣になった。それに李孝石イ・ヒョソク（小説家、趙容萬の中学、京城帝大の先輩、地方の中学の教員）と鄭芝溶ジョン・ジヨン（李泰俊の中学の先輩、詩人、『カトリック青年』編集）の2人を加えて8人となったが、吉数である「九」にこだわり、映画関係がいるのだからと演劇関係の柳致眞ユ・チジンを強引に誘ってはじめてた。

しかし、第1回の集まりである1933年7月末の会でいきなり柳致鎮が辞め、8月に開かれた第2

回を最後に、李鍾鳴と金幽影も辞めてしまった。会は単なる親睦の会とし、会長も規則も定めない「純粋な文学の集まり」としたが、これが李鍾鳴と金幽影の当初の思惑と違っていたこと、そしていざ集まってみると李泰俊が中心になってしまい、そのことへの不満が大きかったようだ。李鍾鳴と金幽影は廉想渉をリーダーとして推戴し、反カップ文学の砦として「九人会」を考えていたのに、李泰俊の反対でこれがかなわなかったのだ。また、柳致鎮は最初からやる気がなかったようだ。

このように、「九人会」は事実上 6 人ではじめられた。9 月には新学期がはじまって田舎に帰ってしまった李孝石を除くと 5 人になってしまうため、朴泰遠（趙容萬の中学の同級生）と李箱（鄭芝溶と親交があり、朴泰遠の友人）を入れて 7 人としたという。無職だった李箱と朴泰遠が会の幹事の役をこなし、常に周囲を爆笑の渦に引き込む 2 人の掛け合い漫才のような会話で、「九人会」は盛り上げられていったという。

「今日の晩、我ら四銃士が清遊するのは奈辺かな？」

李箱は気分のいい時ならこんなふうに漢語をたくさん使う。

「はは、奈辺だなんて！ いつも行っているところを知っていながら尋ねるとは、李箱らしくもない丁口竹天なことだね！」

李箱の相方である仇甫（朴泰遠）は、またこんなふうに半畳を入れた。〈丁口竹天〉の四文字をあわせれば「可笑」という文字になる。そんなことをきいてくるなんておかしいぜ、という意味だった。

李箱と仇甫は本当にいいコンビだった。まず風采から、李箱が蓬髪に髭であるのに対して、仇甫のおかっぱ頭がいい組みあわせになっており、しゃべりにおいてもふたりがやりとりすることばを側で聞いていれば、抱腹絶倒の漫談家の興行を見ているようであり、居酒屋でふたりがやったりとったりするのを主人の女性を冗談で笑わせておけば、次からはツケで飲んでも問題ないほどだった。ふたりとも暇な身だったので、夜となく昼となくくっついて歩きながら、いろいろおしゃべりしていた。（『九人会をつくる頃』『九人会をつくる頃』、1988 年、73 頁）

その風貌と機知に富んだやりとりは、ボケとツッコミによる漫才を連想させる。「おかっぱ頭」の朴泰遠はボケ、蓬髪に髭面という李箱はツッコミだろうか。後にも触れるが、当時の日本にはエンタツ・アチャコ、玉松一郎・ミスワカナといった漫才コンビが、ラジオなどのメディアを通じて全国的な人気を博していた時代である。しかし、それは日本語の世界のことで、朝鮮には日本人が楽しめたような、誰でもが共通の話題として笑いを共有できたような「お笑い」など存在しなかった。それが当時の朝鮮の空気だったのだ。そして、その分だけ個人的なレベルでの「漫才」は、場の雰囲気盛り上げる最高の清涼剤だったのではないか。

その後、九人会は、李孝石がそのまま辞めてしまい、趙容萬も辞めたという。その代わり、趙碧巖、朴八陽が相次いで入会し、さらに金煥泰（評論家）、金裕貞（小説家）なども加わったが、語り部である趙容萬が退会した後であるため、そのはっきりした時期はわからない。ただし、1934 年に李無用と趙碧巖が、会員の「(文学) 傾向の不一致と矛盾性」を指摘して退会したとある

ため（白鉄『新文学思潮史』、新丘文化社、1986年、434頁）、先に李孝石と趙容萬の穴埋めに趙碧巖と朴八陽が入り、さらに李無用と趙碧巖が1934年に退会したのを受けて金裕貞と金煥泰が迎えられたのかも知れない（金裕貞のデビューは1935年だから、「九人会」への参加もそれ以降か。金煥泰も本格的な活動は1934年から。彼がソウルにやってくるのが1935年からなので、おそらく1935年以降のこと）。ともかく、1936年9月に李箱が日本に行ってしまった頃に、この会自体が消滅してしまっている。ちなみに、李箱の友人である具本雄ク・ボヌンが協力して機関誌『詩と小説』を1936年3月に出版している。「九人会」の機関誌はこの1冊のみである。

このように、韓国文学の世界で、ありふれて「モダニズム」と呼ばれるこの「九人会」は、吉数である「九」にこだわっていること（結局「九」人集まったことがほとんどない）、またモダニズム傾向のある作品を書いていたのは当初のメンバーでは金起林と李箱、朴泰遠ぐらいであり、朴八陽や鄭芝溶がそれに近かったとしても、それほど「モダニズム文学グループ」といえるほどではなかったことがわかる。だいたい、吉数にこだわる時点でありモダニズム的ではない。

だとすれば、この文学会は一体どのような性質のものだったのだろうか。まずは、「反カップ文学」を目指していたものの、それを表だってすることには反対であった者たちが中心になっていている。すなわち、「いい作品をおとなしく書く」という集まりだ。これは一見非政治的ではあるが、体制に批判的ではないという意味ではむしろ体制的であり、まさに「非政治の政治」を体現した文学会であったといっている。

また、先にも述べたように、原稿料を得たいという直接的な動機もあるだろう。雑誌でいくらい小説を書いても原稿料にはならなかった。だから、新聞関係者を引き込んだのは、カップ（「開闢」や「朝鮮之光」などの雑誌を活動の場としていた）に対抗するという意味以上に、おそらくは経済的な意味があったのではないと思われる。だとすれば、カップ文学（朝鮮のプロレタリア文学）をめぐる状況は、それを支持する側であれ、反対する側であれ、日本のプロレタリア文学をめぐる状況と自ずと違っているのが見えてくる。それは、日本の無産運動がこのような状況を知ることなく（知ろうと努力もせず）朝鮮の運動を下部組織として扱っていったという事実である。マジョリティはマイノリティのことを知らなくても生きていけるが、マイノリティはマジョリティのことを知らなければ生きていけないというシビアンな現実が、日本と朝鮮の反体制運動にもありありと刻まれているのがわかる。

当時の新聞小説は、李光洙キム・ドンイン、金東仁バク・チヨンフア、廉想渉チエ・マンシク、朴鍾和、蔡萬植といった朝鮮近代文学草創期（1910年代）からの大御所（といっても、このころまだ40歳前後）が押さえてしまっており、新人が小説を書くのはかなり難しかったようだ。しかも大御所たちは年齢的にもかなり若く、ちょうど作品を多作しはじめるころであった。当時の20代作家の苦しみは想像するにあまりある。それは、ほんの少し上の世代が、既得権益のすべてを握ってしまうという、ありがちな世代間の抗争である。そして、彼ら大御所は（廉想渉を除くと）カップ文学に対して「超然としていた」（趙客萬、前掲書、129頁）という。実際、李光洙などはカップ文学にかみついたりしていない（李光洙は当時、東亜日報の編集局だった）。彼ら大御所がそれなりの経済的な基盤があり、既得権もあったため争う必要がなかったといいかえることもできるだろう。まさに「金持ち喧嘩せず」といったところだ。このように、ほんの少しの年齢差によって社会進出の機会が大幅に奪われてしまう事例とし

ては、昨今日本で問題になっている、いわゆる「ロスト・ジェネレーション」の問題とも類似点がある。

カップは1925年に結成され、「朝鮮之光」（1925年から1930年、100号）を中心に活発な活動をしていたが、1931年、1934年と2度にわたって大検挙事件があったため急速に弱体化した。前半の中心人物であった朴英熙^{パク・ヨンヒ}も1932年10月にカップを離脱して転向したため、後半は林和や金南天が中心になっていくが、1935年に解散の届け出を総督府に提出することになる。「九人会」をつくる頃は決してカップが意気軒昂な状態ではなかったわけである。そして、そのカップが解散するや、はかたように「九人会」も消滅してしまうのである。やはり、「九人会」には政治的・経済的な意図＝文壇ヘゲモニーの奪取と原稿料の確保目的があり、それを「純粋文学」ということばで覆い隠していた、まさに「非政治の政治団体」だといわざるをえないのではないか。

さて、金来成に話を戻そう。金来成は1936年に早稲田大学を卒業し、1937年に朝鮮でのデビューを果たしたと述べた。すると、彼はこのカップと反カップの2つのグループがともに解散・消滅したあとに朝鮮に帰ってきたことになる。そのとき彼がひっさげてきたものが探偵小説だった。そして、彼はその探偵小説でそれなりの地位を築いている。ではなぜ彼の探偵小説が朝鮮で受け入れられたのか、次の章で考えてみよう。

3 猟奇の時代－阿部定、白白教、津山30人殺し

金来成が大学を卒業した1936年の早春、日本ではふたつの大事件が起きた。ひとつは二・二六事件であり、もうひとつが阿部定事件である。金来成はこれらの事件を東京にいてつぶさに見ていたことになる。

当時のことを半藤利一氏と丸谷才一氏が対談で次のように語っている。

半藤 とにかく戒厳令ですから、新聞は二・二六事件については一切書けないんです。ところが阿部定は検閲に関係ないから、徹底的に書きまくった。これがすごいんですよ。事件その日は、社会面トップの五段抜きですよ。（半藤利一・丸谷才一「戦争と艶笑の昭和史」『オール読物』2008年6月、87頁）

丸谷 ともかくお定さんは戦前の日本の陰鬱な空気を吹き飛ばすスターでした。立派であるとかさんざん言われていた日本の軍隊が二・二六事件を起こしたりして、あのとき何だか価値体系が狂っちゃったんですね。これまで庶民が信じてきた価値体系が引っ繰り返ったのだということ、違う形でうまく表現したのがお定さんだったんでしょう。（同書、90-91頁）

なるほど、昭和11年にはすでに書きたいことも書けない時代になりはじめていたこと、そのため「冗談を言って馬鹿のように笑うしかないような感じだった」（丸谷、同書、90頁）ということ論じている。

おおむね理解できる議論だが、ひとつだけ違うのではないかと思うのは、「お定さんは戦前の日本の陰鬱な空気を吹き飛ばすスターでした」というところだ。いや、確かにスターには違いないが、「陰鬱な空気」は彼女によって吹き飛ばされたのではない。まさに二・二六事件のような、いよいよという時代にさしかかったとき、彼女に社会の関心が殺到したのは、半藤氏がいみじくも語るように、検閲の問題があり、やはり他に書くことがなかった（書きたいことも書けなかった）からであろう。決して主体的に彼女が「吹き飛ばすスター」として登場したのではなく、むしろ「スタートして登場させられた」のではないか、ということだ。

この時代は猟奇事件が多かったといわれている。たとえば「玉ノ井バラバラ事件」をはじめとして、猟奇的な事件は新聞をにぎわしていた。その最たるものが1936年、まさに二・二六事件当時、新聞で好きなことが書けないときにその「埋め草」にちょうどいい事件として取り上げられた「阿部定事件」と、1938年という「国民精神総動員運動」と「国家総動員法」に代表される戦時体制へと入り込んでしまう時期に起きた「津山30人殺し」だったのではないだろうか。そしてこのような記事を書き続けていくこと自体、報道機関があたかも体制によって圧迫されているようでいて、やはり「非政治の政治」として体制に協力しているシステムになってしまっていたのではないか。これに対する反省がなければ、歴史に学んだことにはならないだろう。

1936年から1928年の間は、新聞が「書きたいことも書けない」時代であると同時に、猟奇の時代であった。それは、総動員運動以降、批判はおろか体制の提灯持ちのような記事しか書けなくなった時代を直前にひかえた、まさに「鬱屈した時代」であった。そして、総動員運動以降は、もう「埋め草」は必要なくなっていく。ひたすらに提灯持ちの記事を書き続けるしかなくなってしまったからだ。さらに戦争も末期にさしかかる1943年以降になると、もはや紙とインク自体がなくなっていく。

これと同じように、朝鮮でも猟奇事件が起きた。1937年2月に発覚した「白白教事件」がそれだ。これは、白白教という新興宗教団体が、金品強奪目的で大量の信者を殺害したという事件だった。もとは白道教事件とつながっているという。1930年に、白道教の教祖である全廷芸チョン・ジョンイェが妾を殺害し、江原道の五聖山に埋めたという事件が発覚する。全廷芸の次男で、すでに白白教をおこして自立していた全龍海チョン・ヨンヘは地下に潜伏した。彼は教団への寄付という名目で財産や娘の供出を要求し、拒むものを京機道揚州郡伊丹面上鳳岩里にある「天苑金鉞事務所」という拠点で次々とリンチ殺人を繰り返した。その数は280人にもものぼる（教祖は死体で発見される。幹部ら24名が逮捕され、1940年に死刑12名、無期懲役2名、禁固15年が1人など大量処分された。『朝鮮日報』1940年4月6日）。

金来成はこの「白白教事件」が起きたちょうどその時期に朝鮮デビューを果たしている。そして、彼の作品では、その白白教の恐ろしさが利用されてもいる。たとえば『少年』誌（朝鮮日報社）に連載された長編小説『白仮面』の広告文には次のようにある。

白白教の一味か？

鐘路の真ん中に現れた白仮面！ 姜博士をつかまえて馬に乘せ、三清洞の方に消えるや、自動車カン・ヨンギル バク・テジョンでそのあとを追う姜永吉、朴大準の2少年！ 朝鮮で初めての大探偵冒険小説！（『朝鮮日

報』1937年5月13日)

もちろん、これは新聞社の方針かも知れない。なんともいうように、「書きたいことが書けない」この時代、猟奇事件ほど紙面を埋めるのに貢献してくれるものはないのだから、積極的にそれを打ち出すのもある意味で必然かも知れない。しかし、だとすればなおのこと、これに無邪気に乗っかっていく金来成の「非政治の政治」に対する認識の甘さが見えてこないだろうか。このような事件の利用の仕方を見ても、彼がやったのは朝鮮民衆の不満の「ガス抜き」であり、積極的に総督府賛美の旗を振る「親日行為」とは別種でありながら、それと同じ方向性をもつものだからだ。

金来成が『ぷろふいる』誌にデビュー作を発表したのは1935年、そして彼が大学を卒業したのが1936年3月である。この時期は日本の探偵小説にとっては「発展期」であった。たとえば、探偵小説専門の雑誌が次々と創刊されている。『ぷろふいる』誌（1933年5月から1937年4月）、『探偵文学』誌（1935年11月から1936年7月）、『月刊探偵』誌（1935年11月から1936年7月）、『探偵春秋』誌（1936年10月から1937年8月）など、かなりの数にのぼる。これらは互いに切磋琢磨しながら、結局「日中戦争」が起こる1937年ごろまでにすべて廃刊してしまう。それはほとんどあだ花のようにさえ見えるのだ。

このころの雰囲気をよく伝えている江戸川乱歩と杉山平助の対談があるので、それを引用してみよう。

平助 自分の思った事を発表すれば抑えられちゃうし。みんな言い度い事が言えない時代という事は本当です。そこでやけくそになったり、若い連中は潜行するより他、仕方がないと云う事になる。しかし潜ってりゃ永久に芽が出ないから、結局軽いところに喰付いて上滑りしてついて行こうと云う傾向が強い。だからいまのような時代には、日本主義だって本当に信じて、時代の潮流に乗って、真面目な文学を書いてゆけば本当の文学になるんだが、そう云う人が却々出ない。阿るなかなか為でなしに腹から信じて居る人があれば国家主義文学だって新鮮なモラルをもったものになり得る可能性があるんだが、却々出ない。だから恋愛なかなかなんかが流行る。恋愛小説なんかでも、細くなると一種の探偵小説と同じですね。（「一問一答」『探偵春秋』1936年12月、ミステリー文学資料館『「探偵春秋」傑作選』光文社文庫、2001年、459頁）

日本の探偵小説作家たちは、自らの立ち位置―「非政治の政治」をよく自覚していたようだ。これは同時代の朝鮮で「九人会」が「非政治の政治」に自覚的だったのに似ている。李泰俊は中央日報の学芸部長であった。そして、朝鮮文学の「大御所」に位置する李光洙が、東亜日報の編集局長であったことは、同じ作家としてよく知っていた。そして李泰俊は、カップのような社会主義的な文学運動に表だって反対しなくても保守の立場には立てることを敏感に知っていたはずだ。それはいいかえれば、「非政治の政治」を技術化し、それを行行使する方法を知っていたということだ。やがて彼は「非政治の政治」の立場に立つことで、「九人会」でも廉想渉を推戴することを退け、さらに反「カップ文学」の旗をふろうとする発起人たる李鍾鳴と金幽影を排除して、事実上のリーダー

ーになったではないか。

ひるがえって金来成の場合はどうであろうか。彼はカップも九人会もあるいは解散し、あるいは消滅したあとに朝鮮に戻ってきた。そして、探偵小説を連続継続して書くことで、朝鮮文学のなかで独特の地位を築くのにな成功した。それは、「書きたいことが書けない」時代の朝鮮の新聞にとってもっともありがたい話題を提供する、猟奇事件に乗った作品をものす二流作家の姿そのものである。

現実に、1930年代に探偵小説を書いた作家は、金来成の他にも数名いる。たとえば1934年に蔡萬植が『艶魔』を朝鮮日報に連載し（5月16日から11月5日）、朴泰遠が『少年探偵団』（『少年』1928年6月？から12月？）を書いた。さらに、金裕貞は1938年の死の直前、翻案探偵小説『失われた宝石』（ヴァン・ダイン作、『朝光』1937年6月から11月）を『朝光』誌に載せている。しかし、彼らは2作目を書かなかった。それはなぜか。ここまで来れば答えは自明だろう。彼らにとって「非政治の政治」は自覚的なものだったのだろう。カップに対し「超然」としていた「大御所」のうちのひとりである蔡萬植はもちろん、カップと闘争せず「純粋文学」を目指した「九人会」の朴泰遠も金裕貞も、当然「猟奇事件」が「書きたいことも書けない」時代の新聞で、経営陣にとっても総督府にとってももっとも便利な「埋め草」であったことを百も承知で書いていたはずだ。彼らはあるいは新聞関係者であり、あるいはその仲間であるのだから、これは間違いないだろう。彼らは時代の要請に敏感に反応しながらも、それにどっぷりつかるとはせず、次の時代を見極めようとしていたのではないか。だとすれば、そのような「純粋文学」＝「非政治の政治」を自覚的に行っていた「九人会」が消滅したあとに朝鮮に戻ってきた金来成が、無邪気に日本でのデビュー実績を手みやげにした形で、猟奇事件を利用しながら／に利用されながら作品を書いている姿は、滑稽にも痛々しくも見えただろう。朝鮮でなぜ彼だけが専門の探偵小説作家になったのか、それは「非政治の政治」というものに対する認識の甘さ、まさに彼の「二流性」のゆえだったといっている。そう、もしも総督府の体制を選択するのなら、「非政治の政治」などではなく、むしろ「親日文学」と後にいわれるようになる積極的な体制派の文学作品を書くことが要求される時代が、目前に迫っているのだから。

そんなこと、朝鮮にいれば、いや、いなくてもわかっていたにちがいない。あとは、その「体制協力の文学」をしなければならない極限状態が、一体いつ来るかということが焦眉の問題だったはずだ。植民地の知識人として、これは避けられない問題だった。無能でなければ、親日派になるか、パルチザンになるか、監獄闘争するか、みつつにひとつしかない時代だったのだから。金来成にはそれが見えていなかったのであろうか。

ついでに、金聖鍾の話をしておこう。「はじめに」でも指摘したように、彼は1970年代にミステリの専門作家として登場する。1974年に発表した長編推理小説『最後の証人』が売れ、反共主義とハードボイルドが融合した独特の世界を築いていったわけだ。彼は韓国ミステリにおける、金来成以来の待望のデビューでありながら、やはり軍事独裁政権に対する「非政治の政治」という立ち位置をとることに躊躇しなかった。新聞、雑誌の紙面の埋め草的な娯楽読み物は、まさに独裁政権への批判を逸らすための「非政治の政治」を体現している。しかも、1974年からは朴正熙が事実上永久大統領に就任した「第四共和国＝維新体制」がスタートしているのだ。当時の文壇も、

「純粋文学（体制派）」と「政治参与（反体制派）」にわかれて激しく対立する。このとき、金聖鍾はおそらくは自覚的に「娯楽作家」という「非政治の政治」の立場を選んだのだろう。

すでに見たように、金来成は1940年代にはいと急速に作品発表の場から追われていく。彼が必要なくなったからだろう。時代が「非政治の政治」としての協力ではなく、より露骨な総督府協力システムを要求してきたからだ。それに見事に乗ったのが、それまで「超然」としていた李光洙だ。「大御所」といっても1930年代末にまだ40代だった彼は、総督府警務局がつくった御用団体「朝鮮文人協会」のリーダー（発起人であり会長）として参加する（1939年10月29日）。このとき、すでに「社会主義リアリズム」とか「純粋文学」とかいう論争は無意味である。総動員体制が成立したあとの朝鮮では、それに追従しないかぎり生きていくことができなくなっているからだ。もとカップのメンバーである朴英熙や李箕永は朝鮮文人協会幹事に、そして「九人会」の鄭芝溶と李泰俊も創立時の発起人のひとりとして名前が挙がっている。李光洙は日本の総動員体制という時代の波を利用し、再び朝鮮文壇のトップに返り咲いたといっている。まさに「洞ヶ峠をきめこんだ」のである。

4 解放、そして金来成～むすびにかえて

解放直後の金来成の作品に「民族の責任」というのがある。これについて、蔡萬植が次のようなことをいっている。

蔡萬植 私は金来成氏の作品を読んで、感じたことがあります。彼は探偵小説を書いてきたひとですから、「生活文化」2号に発表した作品も探偵ものかと思っていたら、読んでみると日本女性と生活していた（朝鮮男性の）話だったんですね。誰でもいじってみたい事実ですが、誰よりも早く書いたところに勇気があるようです。

イ・ウォンジョ

李源朝 直接本人から聞いたことなんですが、過去には生活と、また趣味のために探偵小説を書いたけど、これからは純文学としての探偵小説を書くつもりだということです。

蔡萬植 作品としては見るべきものはなくて……。『創作合評会』『新文学』1946年3月）

この合評会で話題になっている「民族の責任」という小説は、金来成が書いた作品のなかでもっともいいものだと思っている。朝鮮の男性とともに暮らしていた日本人女性が、解放後（戦後）に朝鮮に残るか、日本に帰るかという選択を迫られる状況をテーマに描かれているのだが、このような切り口で解放後の朝鮮を描いた作品は他にないからだ。女性に日本に帰るよう告げる男性の口からは、次のようなことが紡がれる。

「あなたはあなた自身のために行かなければならないのです。それは私があなたに命令するのではなく、厳然たる歴史の一頁が、あなたに命令するのです」

「歴史ですって……？」

「そうです。あなたは朝鮮人になろうと十年間努力してきました。そしてあなたはそれに成功

した人間でした。朝鮮人がもつ思想をもつことができ、朝鮮人の感情を感じることができるようになったのです。朝鮮人の利益を自分のことのように考え、朝鮮人の損失を自らの損失であると信じていました。それは私としても覆うことの出来ない事実だったのです。しかし、ついにはあなたは朝鮮人ではありませんでした。民族の血は努力で変質するはずはないではないのです。歴史がそれをあなたに説明することだろうと信じます。ーいや、泣くようなときではありません。冷静に考えなければならない瞬間だということを知らなければなりませんまい」(「民族の責任」『生活文化』第2号、1946年2月、78-79頁)

さて、「民族」だの「血」だのが実体をもつものなのか、議論の分かれるところかも知れないが、この時代は大きな問題だったのだろう。とくに、朝鮮人になろうとした日本人女性、しかも1940年代の話である。日本人男性に嫁した朝鮮人女性もいただろうが、逆に朝鮮人男性と結婚した日本人女性もいたはずで、当時の男尊女卑のものの考え方も考慮すると、このケースがもっともねじれた、その分深刻な問題だったいえよう。金来成だけがこの問題に正面から取り組んでいく。蔡萬植が評価したのはこの部分だ。

しかし、先の合評会では金南天が「(金来成の)解放後初めての作品であるようですが、まだ読んでいません。しかし、題材が探偵小説式ですね。私たちは解放後の私たちの悩み、そして自己批判のような重要で書くべきことがいくらかでもあるのにもかかわらず、そんなものに取材する必要がどこにありますか」といっている。当時の多くの朝鮮人作家にとって、日本人個々の問題などどうでもよかったのかも知れない。(たとえば、大陸から日本へ帰っていく人びとに哀惜の気持ちのこもった視線を投げる小説家の許俊^{ホ・ジュン}などは、一定の評価をされながらも、「民族主義的には問題がなくはない」(金允植)などといわれたりする)

繰り返すが、この時代に個人の苦しみを描いたのは、金来成の卓見だろう。それは、「非政治の政治」に自覚的でないまま参加してしまった「二流」作家が、総動員体制から日本の敗戦、朝鮮の解放という歴史的な事件を通して到達した地平である。それを素直に評価した蔡萬植も立派だが、金来成の「二流」という評価はいかんともしがたかったようだ。それは、彼を評価する蔡萬植にも「作品としては見るべきものはなくて……」という留保をつけざるをえなかった「空気」にもあらわれている。金南天などは合評会の作品にえらばれているのに読んでさえおらず(読む気がなかったのだろう)、その上「探偵小説式」だと決めつけてさえいる。ここだけを見ても、金来成の朝鮮文学界での評価ははっきりとわかるというものだ。

解放からたった2日後の1945年8月17日に、李泰俊と林和は「朝鮮文学建設本部」を組織し、解放文壇のヘゲモニー争いで一歩リードする。その後、左派系の「朝鮮プロレタリア文学同盟」と合流し、「朝鮮文学作家同盟」といういわば反共以外の作家をすべて含み込む団体へと発展させていく。これに対して反共右派は、作家だけではメンバーが足りずジャーナリストまであわせるかたちで「全朝鮮文筆家協会」を組織(1946年3月)、さらにその若い作家を中心とした団体として「朝鮮青年文学作家協会」をつくり、「朝鮮文学作家同盟」と対抗していく。このとき、「朝鮮青年文学作家協会」のリーダーになったのは、まだ30才を少し過ぎたばかりの金東里^{キム・ドンニ}だった。

金東里は1934年に朝鮮日報新春文芸に詩「白鷺」が、さらに1935年に朝鮮中央日報新春文芸で短編小説「花郎の後裔」が、そして1936年に東亜日報新春文芸で短編小説「山火」が当選した、まさに三大新聞新春文芸を総なめにしてデビューした。当時はまだ「九人会」が存続しており、新聞の学芸面を押さえていた時代だ。また、彼の書いた「花郎の後裔」は、李泰俊の「福德房」と似ていると揶揄されてもいる。そう、彼はある意味で「九人会」の後継者であるのだ。

李泰俊は「九人会」をつくるに際し、廉想渉をリーダーとすることに反対し、李鍾鳴と金幽影という創設者を排除し、先輩である鄭芝溶をパートナーにして朴泰遠と李箱を幹事役にさせることで、「非政治の政治」団体である「九人会」の事実上の会長となった。その彼が、総動員体制下の「朝鮮文人協会」の発起人のひとりとなり、「解放」の2日後には「朝鮮文学建設本部」のリーダーになっている。金来成の「非政治の政治」への無自覚さを追うために九人会について見てきたところ、なにか李泰俊の政治性が見えてきてしまった。

李泰俊は一般的には純朴な文学青年だといわれている。これは嘘ではあるまい。彼は鄭芝溶とともに北朝鮮へとわたってしまうのだが、彼らは社会主義とは縁が遠かったという。

ふたりはどう見てもプロレタリアとはなんの関係もない貴族趣味のひとつであった。尚虚（李泰俊）についていえば、骨董書画を好きで、お金がありさえすれば買い込んでいて、城北洞の家の造作ひとつひとつがプロレタリアとはおよそ縁遠い洗練された高級趣味のにおいが漂っていた。（趙容萬、前掲書、133頁）

いまでもソウル市城北洞には、李泰俊の家（壽硯山房）が残っており、現在はカフェとして活用されている。行ってみればわかるのだが、まさに古き時代の文学愛好家の趣味が生きており、彼の作品から受ける印象とともに、やはり文学や芸術を愛する文学青年の雰囲気や十二分に感じることができる。しかし、彼はそれだけのひとではなかったのではないか。少なくとも「単なる文学青年」ではなかったのではないか、と思われる。

文壇のヘゲモニーを握るということについ色気を出してしまった李泰俊は、結局解放文壇の激しい流れのなかで、行きがかり上「反体制」の立場の文学者同盟でリーダーとなり、時代の空気に抗えず、高揚するような気持ちで北朝鮮をえらんでしまったのではないか。（ちなみに、金来成も「文学者同盟」に参加し、1946年から1947年に大量越北者が出たあと離脱する）

林和も李泰俊もいなくなった韓国で、文壇を平定したのは金東里だった。（詳しくは拙著『朝鮮近代文学とナショナリズム－「抵抗のナショナリズム」批判』作品社、2007年、参照）彼は李泰俊よりもっと政治的に行動するタイプで、「純粋文学」ということばを使って、左派の文学活動を攻撃する。この「政治参与＝反体制」対「純粋文学＝民族文学」という1930年代半ばに見られた対立の図式は、解放直後、そして1970年代と、韓国の歴史のターニング・ポイントごとに登場する。そして、「純粋文学」を唱えるものたちは、いつも政治的なものとは距離をとるというスタンスを示すことで、実際には体制にすり寄るという自覚的な「非政治の政治」を行っている。金東里はその最大の勝利者だったといっている。

最後に、先の引用文で、半藤氏と丸谷氏が、「馬鹿笑いするしかなかった」といっていた時代について考えて見よう。当時の日本はエンタツ・アチャコ、玉松一郎・ミスワカナといった天才漫才コンビが登場した時代である。浪花節では二代目広沢虎造が「清水次郎長伝」で好評を博し、柳家金語楼が爆笑王として君臨していた。映画やラジオはこれを日本中に広めていった。そのような時代のなかで、阿部定事件は起きたのだ。当時「ちょん切る」「切る」ということばで誰もが大笑いしたというのは有名な話だが、ひるがえって朝鮮にはそのような「笑い」はあっただろうか。もちろん、朴泰遠と李箱の会話のように、ごく私的なレベルでの笑いはあったはずだ。そこに日常生活があるかぎり、笑いがあったと思う。しかし、日本で「国民」がみんな馬鹿みたいに笑えるような共通のもの、と比肩しうような笑いは、朝鮮ではちょっとみつからない。

また、日本の文学界であったような、たとえば名物編集者に声をかけてもらえれば作家として成功できるというような文学状況と、朝鮮における書いてもお金にならない状況は、天と地ほど違うといっているのではないか。同じ時代を生きていたはずなのに、これはどういうことだろう。

これについて、筆者はこう考える。閉塞していく時代、いいたいことがいえなくなる時代、そんなとき「内地」では、「馬鹿笑いするしかない」すなわち「みんなで馬鹿笑いぐらいはできて、憂さ晴らしぐらいはできた」のに対し、朝鮮＝「外地」では笑いはごく私的なものに限られ、みんなで馬鹿笑いなどできなかった、憂さ晴らしさえできなかったのだ。これが日本の「植民地」なのだ。経済的な困窮、政治的な差別などの以前に、空気そのものが違っていった。この空気の濃度の違いこそ、「植民地」という現実なのだ。

日本は朝鮮を「併合」した。これは、西洋帝国主義における「植民地」とは多少ニュアンスの違う支配のあり方だろう。「韓国併合条約」ではかたちだけとはいえ対等になっているのだから。しかし、文化研究を通して見えてくる朝鮮の「空気」はこれほどまでに日本と差があり、それこそ息苦しいほどであった。それをここ指摘しておきたい。この「空気の濃度の違い」を見ることが、いま文学研究および批評に求められているのではないかと信じるからだ。

多少飛躍するようだが、いわゆるロスト・ジェネレーションと既得権益層との間にある「空気」の違いも、このような観点から見ていく必要があるだろう。松本哉氏の運動や「素人の乱」など、社会に背負わせられた自らの世代の苦しみを「笑い」に昇華させつつ訴える／訴えざるをえない、ロスト・ジェネレーションをつつむ「空気」の薄さを、筆者は重く受けとめたい。これは「外地」＝朝鮮の問題とはまったく別のものではありながら、両者には共通項がある。それは、マイノリティはマジョリティのことを知らなくては生きていけないが、マジョリティはマイノリティのことを知らなくても生きて行ってしまうという、ある意味で当たり前の構造を浮き彫りにし、批判していくことへとつながるからだ。マジョリティがマイノリティの存在を無視して「時代」を語ってしまう愚を犯さないための自己省察こそが、いま求められているのだから。(了)

付記

本稿ではとくに現代韓国をさすとき以外はすべて「朝鮮、朝鮮語」ということばを使う。また、非日本語文献の引用は、すべて拙訳による。

参考文献

新聞雑誌など

『朝鮮日報』『新文学』『生活文化』

単行本（日本語）

ミステリー文学資料館『「探偵春秋」傑作選』光文社文庫、2001 年

半藤利一・丸谷才一「戦争と艶笑の昭和史」『オール読物』2008 年 6 月

単行本（韓国語）

趙容萬『1930 年代の文化芸術人たち』、ボミョン社、1988 年

『九人会をつくる頃』、正音社、1988 年

趙靈巖『韓国代表作家伝』修文館、1953 年

白鉄『新文学思潮史』、新丘文化社、1986 年

李建志『朝鮮近代文学とナショナリズム——「抵抗のナショナリズム」批判』、作品社、2007 年）

〔付記〕 本稿は科学研究費助成事業「語りの経験ともの語りの修辞学」（基盤研究 B、研究代表者・菅原克也、研究課題番号・24320067）の成果の一部である。

Study of Writers Club in Korea in the 1930's

Kenji LEE

(Kwansei Gakuin University)

Abstract

In the 1930's, in Japan and Korea, many unusual murder cases were happened. But the psychological context of the citizens were different in Japan and Korea. Kim Rae Sung is a popular writer in Korea. He became a follower of the famous Japanese mystery writer Rampo Edogawa of the 1930's, who had been writing many mysteries in Japanese and Korean before 1945. But he has not written mysteries after the Korean independence. Why not any in the colonial era? I think that he was ahead of his time, but he could not understand the meaning of the changing times.

This paper analyses writers' lives, relationships in the colonial Korea, and compares the social backgrounds and situation gap of Korea and Japan.

Key words: Korean literature, 1930's, mystery